

海外の話題

世界の 4 分の 1

農林中央金庫 ロンドン支店長 曾我 道正

昨夏、自身にとって 11 年ぶり2度目となるロンドン勤務がスタートした。以前は歴史と伝統の街らしく、古風な建物が大勢を占めていた当地も、現在ではシティなど中心部にガラス張りのビルが随分と増えたように感じる。また、他にも様々な点で時の流れを痛感する日々を送っている。

まずは、街角のパブに入っても以前はテーブルに酢と塩が必ず置かれていて、これをチップス（フライドポテト）に振りかけて食べたものだが、今では代わりにケチャップが置かれている。知らぬ間にアメリカナイズされたものだ。また、ビールならば必ずと言って良いほど、生ぬるく泡の少ない上面醗酵のビターであったが、今では冷したラガービールを好む人が増えているようだ。街中にはカフェがやたら目につき、紅茶よりもコーヒー文化が幅を利かせているように感じる。このように、古き良き英国フレーバーが薄れてしまったようで、幾分かの寂しさを覚えるが、人の趣向は移ろうものであり、若い人々が上の世代と違う趣向を追い求めるのは何もロンドンに限ったことではあるまい。

それではこれはどうか。夏のバカンス時期、ロンドン市内の高級エリアでは高価なスーパーカーを時折見かけるが、アラビア語のナンバープレートをつけているものが目立つ。聞くとところでは資源国の大富豪が自慢のスーパーカーを持って夏のロンドンへバカンスを過ごしにやって来るらしい。市内の高級百貨店では、以前は日本人駐在員家族の姿が数多く見られたが、今では代わりに資源国・新興国からと思しき人々が両手に持ち切れんばかりの買い物をして街を闊歩する姿がよく見られる。そして、新興国の個人マネーが市内の高級住宅投資に向かっている。歴史的に、これら地域からのマネーが還流するロンドンではあるが、世界経済の構図の変化を映しているようだ。確かに 2000 年から 2010 年までの 10 年間で世界の GDP に占めるシェアは新興国等の伸びが目覚しく、BRICs 諸国が 8%から 18%へ拡大し、米国は 32%から 23%、日本は 14%から 9%へとシェアを落とした。

そして何より時の流れを感じさせるのは、1999 年に創設された統一通貨「ユーロ」の現状である。通貨統合には参加しなかった英国でも、当時ロンドンユーロのオフショアセンターとして盛り上がりの機運を見せていた。2000 年に南欧諸国を訪れた際には、その異常な盛り上がり一抹の不安感を覚えたものだが、11 年後にその不安が現実のものとなってしまった欧州の地に、再び自分が舞い戻って来ようとは予想しなかった。一方で、当時ドイツは労働市場の硬直性が足かせとなって経済が停滞気味だったが、その後の改革を経て今では欧州の優等生となっている。

それではこの間に欧州の GDP シェアはどうだったかと言うと、（現在の EU 加盟国で考えれば）実は世界の約 4 分の 1 をほぼキープしている。ただし重債務国問題が深刻化した昨夏以降の影響を勘案すれば幾分かはシェアを落としているだろう。今後、重債務国では緊縮財政の影響で景気減速が懸念される一方、ドイツ等は域外輸出競争力を存分に発揮して欧州を牽引していくことが期待される。その過程で二極化が進んで欧州域内格差が広がっていくのか、あるいは均衡ある発展へ向けて各国が足並みを揃えることができるのか、そして欧州は再び世界の 4 分の 1 を回復して維持していくことができるのか。ここ数年は試練の時が続こう。この時期に欧州に赴任したのも何かの縁。近くでしっかり見ておきたいと思っている。

（2012 年 3 月 8 日）